

目指す「8つの未来」に沿った5年間（令和3年度～7年度）の評価（案）

（1）多様な活動とコミュニティが息づく街

○令和4年度から実施している「パフォーミングアーツ公演事業」は、観覧者はのべ831人、また、出演団体が小中高校に出向いて実施する身体表現等のワークショップを14校で実施し528人に参加いただき、パフォーマーと子どもたちが学校の壁を越えてつながる動きがみられました。



○令和5年度と6年度に実施した「舞台づくり学校」では、参加者はもちろん参加者の保護者同士もつながり、終了後も、はっちで開催される類似のイベントに一緒に参加するなど、継続的に芸術文化活動に関わるきっかけとなりました。



○「まちぐみ事業」で定期的に開催している「南部ひしげし体験」に課題研究の授業の一環で参加した高校生が、菱刺しの面白さを見出し、何度か体験を重ねた後に指導する側になりました。また、市民や組員から募集したアイディアを基に令和7年度に実施した「歩道補修促進事業」では、活動を知った補修材製造会社から使用法の指導をいただいたほか、まちづくり関係団体や商店街の関係者も参加するなど、まちづくり活動の広がりがみられました。



【課題】

○「暮らし学アカデミー」に参加したリピーターがプロデュースした企画を2件実施しましたが、新しい活動を生み出すまでには至っていません。

(2) 創造的なチャレンジに開かれた街

- 「まちぐみ」での活動をステップに、環境問題に取り組む活動が生まれ、様々なイベントに出展するなど、さらなる展開につながった事例がありました。



- 「暮らし学アカデミー」の特別企画「大人に教えてみたいこと」では、これまでのべ 14 人の小中高校生が講師となりました。日常生活で学ぶ立場である子どもたちが教える立場になり、自分の得意分野を大人世代に伝えることで参加者に気づきを与えるとともに、新たな人材の発掘にも繋がりました。



- 市内高校生が「はっちサポートー」に登録し、館内ボランティアガイドとして活躍する例や、「舞台づくり学校」への参加をきっかけに、身体を動かすことや、表現することに興味を持ち、関連する習い事をはじめるなど、はっちの事業を通じて子どもたちの新たな活動につながる事例が生まれています。



【課題】

- 個人的な動きはあるものの、はっちの企画に参加・出演した方が連携・協力してはっちで継続的な活動を始めるような動きには至っていません。

(3) 顔の見える経済を大切にする街

○令和4年度から実施している、マチニワを会場とした飲食や物販を伴うイベント開催を支援する「マチニワイベント支援事業」では、飲食や物販を伴う62件のイベントを支援し、のべ601店の出店があり、利用の少ない平日や冬期間のイベントの開催が増えました。また、イベントには、のべ27,843人（主催者発表）にお越しいただき、閑散期においても中心街の賑わいを創出ができた（令和7年7月末時点）。



○「マチニワイベント支援事業」は、3者以上による共同開催を条件としており、事業者同士のつながりが生まれました。多種多様なイベントが実施されるとともに、複数回実施するイベントもあり、継続的な開催による各団体の知名度の向上、企画力や経験値の向上にもつながっています。



○全国からの公募と中心街の個店が出展するクラフト市「暮らふとマーケット」は、令和4年度に実施して以降、年々出展希望者が増加しており、イベントの認知度や出展者側の満足度が高まっていることがうかがえます。また、令和6年度は、来館者数が同月土日祝日の1日平均の約1.8倍となり、賑わい創出も図られました。



○地域資源である横丁を舞台にした「オンリーユーシアター」は、令和6年度に15周年を迎えた。その間、東北ディスティネーションキャンペーンも実施され、また、横丁月間として横丁で開催されるイベントを同時にプロモーションすることで、八戸の横丁の知名度の向上に貢献してい

ます。



○「オンリーユーシアター」は、横丁の空き店舗のほかマチニワを会場にパフォーマンスを実施することで、若い世代や観光客にも楽しんでいただける企画となっており、令和6年度は、前年度比約1.5倍のチケット販売となりました。



○来年2月11日に開館15周年を迎えるにあたり、現在、南部裂織で織った布で館内リビングの椅子のカバーを制作するプロジェクト「南部裂織イスカバープロジェクト Re:CHAIR～つないで、つなぐ、はっちの15周年～」を実施しています。制作にあたり、仕立てを専門としているものづくり入居者に型紙を製作してもらい、南部裂織を手掛けている入居者の指導のもと、市民と一緒に制作しています。3周年を記念して市民と一緒に制作した巨大なタペストリー「BIG南部裂織」のように、日常的に使われることで多くの人に愛される作品となるように進めています。



○令和6年度から、マチニワで「ナイトマーケット」が開催されておりますが、郊外の人気店も参加し、夕食をテイクアウトする方やマチニワで楽しむ方々で賑わっています。自走化を目指し、今後も継続して開催していく予定です。



【課題】

○令和5年度に、「マチニワイイベント支援事業」を活用し、三八地域の若手農業者らによる「さんばちファーマーズマーケット」を実施しましたが、継続した開催にはいたりませんでした。一方で、「八戸ハマリレーションプロジェクト」による「八戸夏やさいマルシェ＆夏のブイヤベース」では、市内近郊農家による夏野菜の直売や市内レストランとタイアップした取り組みも生まれています。



(4) 寛容と共生を価値とする街

○共生社会プロジェクトとして令和6年度に初開催した「盆踊りディスコ」では、市内福祉施設や養護学校にヒアリングをし企画段階から連携したことから、単なる参加者としてではなく、事業のパートナーとして継続した関係を築くことができました。



○令和6年4月に障害者差別解消法が改正されたことを受け、スタッフを研修に派遣するなど、積極的な取り組みを行ったことをきっかけに、国際障害者交流センター（愛称：ビッグ・アイ※1）より協力依頼を受け、同年11月に、障害の有無等を問わずに参加できるダンスイベント「DANCE CARAVAN IN AOMORI CATCH THE BEAT」（主催：ビッグ・アイ）をシアター2で実施することとなりました。八戸市のヒップホップダンサーのRINKAさんもワークショップの講師として参加しました。

※1 障がい者が主役の芸術・文化・国際交流活動の機会を創出し、障がい者の社会参加を促進するため、厚生労働省が2001年に開設した施設。本拠地は大阪府堺市。



○令和5年度から、多言語観光情報サイト「Guidoor」を活用し、はっちの概要や館内展示の多言語での情報発信をしています。QRコードを読み取ることで8つ言語での案内が可能です。



【課題】

○令和5年度以降、障がい者の参加を促すイベント開催にむけて取り組み実施していますが、スタッフ間の問題意識の共有等が今後の検討課題です。令和6年度から開催している、障がい者でも参加しやすいように福祉施設等と連携して企画した「盆踊りディスコ」の経験を生かして、今後の取り組みについて検討してまいります。

(5) 伝統が誇らしく受け継がれる街

○「伝統工芸プロジェクト」や「AIR事業」などで、「南部菱刺し」や「南部裂織」、「スケート」、「騎馬打毬」、「食用菊」などの伝統工芸や地域の文化をテーマにしたプロジェクトを実施し、地域の魅力を再発見する機会を創出できました。



○令和6年度に実施した「天羽やよい展」では、12日間の会期中に約2,400人という多くの来場者に来ていただいたほか、トークイベントではキャンセル待ちとなるなど、南部菱刺しに対する関心の高さがうかがえました。



○「お祭り連携事業」として、八戸三社大祭や八戸えんぶりなどの八戸を代表するお祭りの時期に合わせて、祭りに対する愛着醸成及び観光客への祭りの魅力の発信を実施しました。八戸三社大祭では、テーマを絞って歴史を伝える特集展示や公開講座、はちのへ山車振興会の協力・協賛でマチニワでの山車展示をしています。小太鼓体験ができるコーナーを設置したほか、山車の展示期間中は、山車組のお囃子の公開練習をし、お囃子や引き子の募集に協力するなど、関係団体と連携し、祭りの継承に力を入れています。



○八戸えんぶりの期間は、参加団体によるマチニワでのステージ公演を実施していますが、多くの方に喜んでいただいています。また、衣装を着て写真撮影ができるコーナーの設置、市内大学と連携した八戸ブイヤベースの提供等観光客も楽しめる企画を実施しています。



○市民活動支援事業として毎年開催している「はっちがずっと南部弁」の各企画を通して、南部弁の魅力発信を行うことで、南部弁が廃れ行くことへの危機感の共有を行っています。



【課題】

○伝統工芸に関心を持つ方は多いものの新たな担い手の発掘や育成には至っていませんが、はっちの役割としては、多種多様な伝統芸能の技や作り手を紹介することにより、その魅力を発信していくことであると考えています。今後も、地域の作家や伝統工芸への興味・関心を喚起する事業に取り組んでいきます。

(6) 子育てが楽しくなる街

○「こどもはっち」では、事業受託者のNPO法人はちのへ未来ネットによる親子で楽しめるイベントや相談事業等が多数行われ、年間約3万人の利用者に活用いただいており、子育て世代の市民にとってなくてはならない場所として親しまれています。また、高校生ボランティアの活躍や市内外の高校と連携した企画実施など、世代間交流も促す貴重な施設となっております。



○自主事業に合わせ、マチニワでの段ボール迷路と積み木を楽しむ空間づくりを創出したほか、親子で参加できる「はっちガーデンお手入れ隊」などを実施しました。令和6年度は、具材となって巻かれる「人間のり巻き」体験をAIR事業で実施し257名に参加いただきましたが、親子で一緒に巻かれる参加者も多数おりました。



【課題】

- 「こどもはっち」は中心街にある子育てセンターであることから、施設を利用するだけでなく、利用する親子がまちづくりに参画し、次の世代につなげていく仕組みづくりが必要です。

(7) 緑を豊かにはぐくむ街

- 「グリーンプロジェクト」では、はっち屋外やマチニワのプランターの植え替え作業を市民と一緒に実施することで、まちの景観に関心を持ち、はっちやまち全体への愛着醸成が図られています。



- 地元商店街やロータリークラブなど、中心街の緑化に取り組む団体と連携・協力して、花小路や三日町・十三日町沿いの緑化活動に協力し、中心街の緑化増進に貢献しています。



【課題】

- 開館当初より、壁面緑化やはっちコート緑化等を試み、屋外の植栽やプランター設置等と併せて建物の緑化に努めてきましたが、冬季に枯れたり、自動散水機能が経年劣化等により使用できない状況にあります。このような中、中心街の緑化活動（花小路大作戦、八戸中央ロータリークラブや東高校インタークラブ等）と協力しながら屋外緑化活動が継続されていることから、市民と一緒に緑化をすすめる取り組みを進めていきたいと考えています。

(8) 情報の発信とアクセスに優れた街

- 令和3年度から実施している「アンブレラスカイ」は、映えスポットを創出するだけでなく、忘れ物の傘に親子でペイントをするワークショップ「アンブレラスカイ デコレーションワークショップ」を開催しておりますが、市民と一緒に作りあげる企画として評価が高く、JRとの企画連携で同時期にJR本八戸駅にも傘が飾られました。また、事業者からの提案で、「津軽びいどろ」をイメージした傘を提供いただき、館内で展示をし、1階のショップで販売するなど広がりが生まれています。（シーズンイベント）



○外国人来館者も増えており、多言語観光情報サイト Guidoor で多言語による観光案内を提供しているほか、英語での案内の勉強にも取り組み、積極的に英語での案内を実践しているボランティアガイドもいらっしゃいます。(観光展示)

○地元の八戸ですてきなデザインのチラシを作っているのが嬉しいというお客様からの声や、東京の店舗に置かれていた「はちみつ」を見てはっちを知り、実際に来館してくれたお客さまがいるなど、はっちや八戸市の PR に貢献しています。(情報誌「はちみつ」)



【課題】

○八戸市美術館の開館に伴い、市内文化関連施設等で実施される文化事業をまとめて発信することとなり、はっちの広報媒体の 1 つであった情報誌「はちみつ」の発行を停止しました。現在は、ページ数や発行部数を縮小した「はちみつ petit」を発行しています。今後、情報誌の在り方について検討をしていきます。

○自主事業の集客、入居テナントを含めた施設情報、八戸の観光のポータルとして観光客に役立つ情報、施設を借りる方への情報の提供など、多くの人にとって利用しやすい施設となるよう、情報発信機能を強化が必要です。

【その他の成果、効果】

○はっちの企画や運営に携わり卒業していったコーディネーターは、はっちで培った経験や人的ネットワークを生かし、芸術文化、まちづくり、観光、報道など多岐にわたる分野で活躍しています。また、ものづくりスタジオに入居していた方々は、入居中に培ったノウハウを生かし、それぞれの分野で活躍されています。

○学生時代にはっちの事業に関わったり、はっちのリビングで勉強していた方が企画コーディネーターとして U ターン就職しています。学生時代にはっちに関わることで、まちづくりや文化芸術に関心を持ち、遠方で学んだ後で地元で活躍している好例であるととらえています。

○年間、多くの視察を受け入れていますが、館内を見学した多くの視察者が、子どもから学生、観光客や高齢者といった幅広い世代が利用している様子を見て、他の施設にない光景であると驚いていきます。

【周辺環境の変化】

○平成 28 年に八戸ブックセンター、令和元年に YS アリーナ、令和 3 年に八戸市美術館がリニューアルしてオープンしました。中心街に多岐にわたる機能を持つ施設があることで、市民の創造的な活動の場が増えています。